日本語文の統語上の熟達度の比較
—プロと学生の場合—

三　浦　順　治

1．序

本論文は、プロと学生の文（センテンス）の、統語上の熟達度の違いを探ろうとするものである。

１文を「１語を起こしてからまる（句点）で終わるまで」として、字数で日本の教科書の文の長さをみると次のようになる。（森岡）

教科書文の字数

小３	小６	中３	高３
24.8字	36.3字	43.5字	47.0字

雑誌文の字数

児童	大衆	総合ａ	総合ｂ	専門
29.1字	37.5字	42.5字	58.7字	75.7字

字数では日本の教科書の文は学年が進むにつれて長くなっているし、また雑誌も内容が複雑になるほど長さも変わってくる。少学３年と児童雑誌、小学6年と大衆雑誌、中学３年と総合雑誌aなどの字数が大体一致する。

それでは大学生の書く文はどうであろうか。18，19歳の頃が物書きの訓練をして一番の伸長の時期と言われる。その年齢の大学生のレポートと長年付き合ってきたが、読みやすいのもあるが、かなり苦労するもののほうが多い。本論文では、その実態をプロの文と比べてあきらかにしようとするものである。

1.1．検証の対象

ひと口に文章といっても、何のために書くかという目的からみると幾つかのカテゴリーに分けられる。そしてそのカテゴリーにより、文の質もまた異なる。常識的に四つのカテゴリーがある。それは描写文（descriptive writing）、物語文（narrative writing）、説明文（descriptive writing）、そして論証文（argumentative writing）である。このうち事実（fact）や考え（idea）を、読み手の理知に訴えて説明しようとするレポート、小論文、入社試験など、論理的な分析を要求されるのが説明文である。英語では、上述の四つのカテゴリーのうち、前の二つのカテゴリーの文は統語的な複雑度はかなり低いといわれる。（Faigley）

この論文では、その材料として説明文である学生のレポートと、プロのエッセーを取り上げて比較を試みる。さらに参考までに、それは大体において描写文・物語文に属するものであるが、芥川賞と直木賞の作品をも検討材料に取り上げる。

調査の対象としての学生の書いたレポートは10名分で、秋田大学英語科の３，４年次の学生の

ものである。5週間の教育実習のあとで「自分の理想の英語教育」というテーマで書いたものである。プロのエッセーの作家は、堺屋太一、立花隆、竹内久美子、大野晋、丸谷才一、加藤周一の6氏であるが、作品名は後ろに[資料に用いた作品]として示してある。小説の直木賞、芥川賞の作家は芦原すなお、高橋美夫、伊集院静、出久根達郎、高村薫、大沢在昌、萩野アンナ、佐藤雅美、中村彰、海老沢泰久、小川洋子、辺見庸、松村栄子、藤原智美、多和田葉子、吉目木晴彦の16氏であるが、作品名は同様に後ろに示した。

サンプルとしてはそれぞれの作品から、会話文を含まない5文を取り上げ、次の5項目、即ち、文構造の種類、T-unit当りの文節数、T-unit当りの節数、節当りの文節数、さらに等位接続の「ＡＮＤ，ＢＵＴ相当語」の使用の予測をし、次に実際にあらわれた数値を比較、検討した。

1.1.1. 文構造の種類の予測

単文、重文、複文、混文の4つの文構造の使われ方の頻度をみる。書きなれているプロにあっては、構造の複雑な複文や混文が多用されるであろう。特に従属節や等位節を自由に取り入れた文を書くであろう。書きなれない学生は単純なchoppyな文を書くことが予測される。

1.1.2. T－unit当りの文節数の予測

文（センテンス）の長さを「文の書き始めから句点まで」とすると子供は洋の東西を問わず長い文を書くと言われる。それは子供の文にはandの相当語すなわち日本語では「そして、それで、～と、～して」などが多用されているのが特徴的であるからである。これを使用すると文はいくらでもsequentialに長くなる。このand，but，soなどの等位接続詞の多用により文が長くなるのは英語でも同様である。 Huntはそこで文の長さの伝統的な尺度を変えて“minimal terminable unit”（略してT-unit；最小終結可能単位)の考えを導入した。

> the shortest units into which a piece of discourse can be cut without leaving any sentence fragments as residue(Hunt)

これをChristensenはさらにパラフレーズしていう。

> “terminable” because it is grammatically allowable to terminate them, like sentences, with a capital letter at one end and a period or other terminal mark at the other; and ”minimal” in the sense that they are the shortest units into which a passage can be thus segmented without leaving fragments as a residue.(Christensen)

すなわち

> 「T-unitとは終結可能な単位であること。それは文（センテンス）のように一方の端に大文字を、他方にピリオドあるいは他の終結のマークを置いて、文法的に終わらせることのできるものである。またそれは最小の単位である。それには残滓としての語句を残すことなく分割しうる最小の単位である」

もっと簡潔に言い換えると

「T-unitとは、一つの主節（main clause）にプラスして、いくつでもよいその主節に必要であれば付け加えられ、あるいはその中に埋め込まれる、従属要素のことである」

この定義を使った場合、学生とプロの日本語文のT-unitと文節数の関係はどうなるであろうか。論理を進めようとする経験あるエッセィストと未熟な学生ではおそらくT-unit当たりの文節数はプロの方が当然上回ることが予想される。小説の場合はまたどうであろうか。

1.1.3. T-unit当りの節数の予測

この場合の節とは、主節、従属節の両方である。もし、ある人の文のT-unit当り節数が平均1であるとすれば、その人は主節のみ、すなわち単文のみを書いた事になる。数値が1を超えて大きくなるほどT-unit当りの節数が多いことになる。アメリカ人の作文では、従属節の数は普通は高校3年生で最高に達し、それ以後はこのレベルを超える生徒は、次第に節を縮小したり統合したりすることを覚えてくるといわれる。

日本語の場合はどうであろうか。左枝分かれ構造の日本語では、節数が増えることは理解を妨げる大きい要因となる。右枝分かれ構造をもつ英語の文章論では、一つとして短い文を書けというのにはお目にかからない。学校での作文のクラスでは、sentence combiningとかcumulative sentenceのための指導がなされる。これに対して日本語の場合は短く、簡明な文を書くことを勧めている。

「長い文を短くできないか。どんな文でも短く切れるものなら、短くするに越したことはない。読み直しながら、長く書き直すよりは、短く書き直すほうが重要だ」（板坂）

「実に口語体の大いなる欠点は、表現法の自由に釣られて長たらしくなり、放漫に陥り易いことでありまして、徒に言葉を積みかさねるために却って意味が汲み取りにくくなりつつある。故に当今の急務は、この口語体の放漫を引き締め、出来るだけ単純化することにあるのでありますが…」（谷崎）

「…1つ1つの文をできるだけ短くする、ということだった。ぽっぽっと切れた感じになってもよい。1つの文のなかに、1つの事しか書くなということである。『一事一文の原則』とでもいうか」（馬場）

プロにあっては複雑な文を書く結果、節の数も学生よりも多くなるのだろうか。それともなんらかの工夫をして節の数を少なくし、なお十分な内容を伝えるのだろうか。

1.1.4. 節当りの文節数の予測

主語と動詞、それに修飾語・句を伴った節数が、T-unitの中に増えていくことは読解を困難にする。さらに節当たりの文節数が増えること、すなわち長い節が増えることは加速的に読解を困難にする。学生の書く、読みにくいレポートの文は、文節数の多い節がさらに重なって現れるためではないかと推察される。

プロの文が、学生のものよりも読みやすいとするならば、節当たりの文節数にも関係あるのか。

1.1.5. 等位接続詞AND,BUT相当語の使用の予測

熟達した書き手の文で多用されると推測される、従属接続詞に代わって、学生は等位接続語で直線的に文をつないでいくだろう。順接では子供が多くするようにAND相当語が多用され、また逆接のBUTの多用により論旨がゆれるであろう。

2．プロと学生の文の実際

これまで見てきた五つの予測について、学生のレポート、プロのエッセイ、それにプロの小説（今後、それぞれ学生、プロ、小説と表示）を資料として分析し、検討を加えてみる。

2.1. 文構造の種類の違い

単文、重文、複文、混文のそれぞれがどんな割合で使われているか。学生、プロ、小説を５名ずつ抽出し読みやすい順に１～５に並べた。それぞれについて５文をサンプルとした。

（学生）

	単　文	重　文	複　文	混　文
学生１	1	0	2	2
学生２	1	0	0	4
学生３	0	0	1	4
学生４	0	0	1	4
学生５	1	0	0	4
使用％	12％	0％	16％	72％

（プロ）

	単　文	重　文	複　文	混　文
プロ１	4	1	0	0
プロ２	3	1	0	0
プロ３	2	2	1	0
プロ４	1	1	2	1
プロ５	2	1	2	0
使用％	48％	24％	24％	4％

（小説）

	単　文	重　文	複　文	混　文
小説家１	2	1	1	1
小説家２	1	2	1	1
小説家３	1	3	0	1
小説家４	3	0	1	1
小説家５	0	2	1	2
使用％	28％	32％	16％	24％

予測に反してプロは単文が多く、全体の文の48%を占める。これに対して学生の単文はわずかに12%で、一文を単文で終えることをしていない。学生は混文を多用し、実に78%を占める。これに対してプロはほんの4%にすぎない。重文は単文の連鎖であり、読みやすい。プロは重文が24%であるのに対して、学生は0%である。長くても重文は読みやすいのである。読みやすい単文と重文の和は、プロが実に72%、学生は12%に過ぎない。プロのエッセーの読みやすさと、学生のレポートの読みづらさは、単文と混文の差にある。これに対して小説家は、プロのエッセイストと同様に単文と重文を多用はしているが、いずれも混文も使用しており、プロよりも文の種類においてはバラエティに富んでいる。

日本語文でも英文でも、文章書きの本には、長短の文を織り交ぜて構成する文章が、独特のリズムやわかりやすさを生むという。だが、英語の長い文は日本語の長い文とは構造上異なる。英語の場合は従属節とfree modifier が加わって長くなっている。これに対して、日本語のプロの書く長い文はand 相当語の使用によるものである。この相当語を除くと、残りは単文の連鎖であり短いT-unitである。

2.2. T-unit当りの文節数にみられる差

	T-unit当り 文 節 数	平均
学 生	12.0 12.8 16.8 14.6 7.6 13.0 12.4 14.6 6.4 7.8	11.8
プ ロ	5.5 6.6 6.3 6.0 5.5 7.16	5.95
小 説	7.0 4.0 9.0 6.0 7.8 5.0 6.8 5.4	6.14

説明文にあっては、プロの文節数が学生のそれよりも大きいと予測したが、実際は逆であった。平均値でみると、学生はT-unit当り11.8文節、それに対してプロは5.95文節であり、学生はプロの倍の長さのT-unitの文を書く。

『新英文構成法』(三浦)では、秋田市内の小、中、高の生徒、学生の作文の分析からT-unit当りの文節数を提示したが、これに今回の大学生とプロ、小説の分を加えると次のようになる。

(T-unit当り文節数)

学 年	2	3	4	5	6	中3	高2	大学	プロ	小説
文節数	6.2	6.7	5.6	6.7	7.0	8.0	8.6	11.8	6.0	6.1

注目すべきはプロのT-unit当りの文節数である。プロの6.0、そして小説の6.1という数値は、小学2年生の場合よりも小さいということである。日本語ではプロは推敲を重ねるごとに、T-unit当りの長さを小さくするように努めていることがわかる。

馬場は『読ませる文章の書き方』で、文章は短く切っていけば、話はすっきりするとして、次の例を示している。

私はきのう、銀座の、うまいコーヒーを飲ませ、いい音楽を聞かせる喫茶店で、B君に紹介されたC君に会った。

↓

私はきのうC君に会った。C君はB君に紹介された人だ。会ったのは銀座の喫茶店で、な

かなかコーヒーがうまく、聞かせる音楽もよかった。

はじめの原文の方はT-unit　14.0で、大学生の場合よりも大きく、書き直した方はT-unit　3.4となり、上述のプロ、小説の場合よりもさらに小さい。

もう一つ例を示そう。光村図書『国語表現教授資料』のなかに、悪文から改良された例がある。

① もとの悪文例

何事も忍びに忍んで病苦と闘いながらよく耐えてきた母も、遂に実家へ帰らねばならぬ日が来た。学校から帰って、家の中に母のいないことを知ると私は暗い気持ちに沈んで行った。父は「実家へ行ったが直ぐ帰って来る」と云ったけれど、私には嫌な予感があった。母のゐない、海底のように暗い家の中に、私達兄妹の冷たい生活はそれから果てしなく続いた。（T-unit当り7.8文節）

② 上を改良した文を谷崎潤一郎が推敲した文章

病苦と闘ひ、何事をも忍んできた母も、たうたう実家へ帰る日がきた。私は或る日学校から帰ると、母がゐないことを知って、暗い気持ちがした。父は、「実家へ行ったのだ、すぐ帰って来る」と云ったけれども、嫌な予感があった。それからは母のゐない家の中に、私達兄妹の冷たい生活が続いた。（T-unit当り6.4文節）

③ 上をさらに本多勝一が推敲した文章

病苦と闘い、何事をも忍んで来た母も、とうとう実家へ帰る日が来た。ある日学校から帰ると、母がいないことを知って私は暗い気持ちがした。「実家へ行ったのだ。すぐ帰って来る」と父は言ったけれども…　（T-unit当り6.2文節）

芥川賞、直木賞作家のT-unit　6.1文節は、谷崎、本多両氏の6.4文節,6.2文節と殆ど同じで、またプロのエッセーも6.0文節であることから、この長さが読みやすい日本語の文の平均的な長さであろう。

日本語のプロの文は上述のとおりであるが、英文ではChristensen とHuntは熟達した大人の文の平均的な長さを、それぞれ19.5語、20.3語としている。この違いはどこにあるのだろう。

すべての言語のfeature　の獲得には固定した順序がある。語順の構造は、英文は「右枝分かれ」（right branching）日本文は「左枝分かれ」（left branching）である。基本的な文は子供でも、どちらの枝分かれでも問題なく獲得するといわれる。これが複合構造（complex structure）になると極めて大きい違いがみられ、Bauerは「non-complex structureでは、「左枝分かれ」構文（SOV）と「右枝分かれ」構文（SVO）の獲得の違いは小さい。しかし節をその中に埋め込んだcomplex structureになると、獲得のギャップは劇的に「右枝分かれ」構文に有利になる」という。

またYngveは、心理学のなした測定を援用して、枝分かれの接点の数すなわち深さは、人間の即時記憶（immediate memory）に大きな影響をもつという。「左枝分かれ」の構造では、接点を一つ経るごとに記憶の指数は１つづつ増える、つまり深さが増して負担が増えていく。そして実際に口語で一度に理解し、記憶し、繰り返すことのできるitemは一定数を超えることはなく＜７±２＞であるという。英語のように「右枝分かれ」の構造ではこのような制限はない。

2.3. T-unit当りの節数にみられる差

	節　数										平均
学　生	2.8	3.0	3.0	3.0	1.4	2.2	1.6	3.2	1.4	2.2	2.4
プ　ロ	1.4	1.0	1.8	1.0	2.0	1.4	2.6	1.6	1.4	1.2	1.5
小　説	1.6	1.4	1.0	1.4	1.3	1.0					1.3

一つのT-unitの中にいくつの節が組み込まれているかの問題である。当然のことであるが、混文の好きな学生はおしなべて特徴的に節数が多い。プロ、小説にあっては節数1.0すなわち従属節がなく、主節のみというのもあり、これは読みやすく単文でまとめようとの努力の現われであろう。

2.4. 節当り文節数にみられる差

	文　節　数										平均
学　生	4.2	4.3	4.4	4.9	5.4	5.9	7.6	4.6	4.0	3.5	4.9
プ　ロ	4.7	3.8	5.5	4.4	5.4	4.4	5.4	6.6			4.9
小　説	5.0	4.0	3.6	3.7	3.8	4.1	3.0	3.1	5.0	4.5	4.0

学生のレポート、プロのエッセーともに節当たり文節数は同じ数値である。このことは長い、読みにくい学生の文を特徴づけているのは、節の長さよりは、節数が多いということ、すなわち従属節を多用するということである。3者ともに平均値とは別に個人的な差がみられる。特に学生において顕著である。

2.5. 等位接続詞　ＡＮＤ，ＢＵＴ　相当語の文中での使用の実際

5文中の使用回数一人あたり平均

	AND相当語	BUT相当語
学　生	1.9	0.8
プ　ロ	1.0	0.6
小　説	1.0	0.3

文を、書き出しから句点までとすると、学生は一文中にANDとBUT相当語ともにプロ、小説よりも多用する。順接のAND相当語の多用は文構造の上からは理解の困難度を増すことはない。しかし論旨の焦点はぼやける。

問題は逆接のBUT相当語の多用である。逆接文は説明文において学生、プロともに多いが、やはり学生が多い。逆接の多用は論旨の流れを不鮮明にする。説明文でない小説においては、その性質上BUT相当語は学生、プロよりも使用は少ない。

3．まとめと幾つかの示唆

プロの書く説明文と学生のレポートの統語上の違いは以下のようにまとめられよう。

イ　プロは単文を書き（したがって短い）、学生は複文・混文を多用し、長い錯綜した文を書く（したがって理解に困難を伴う）。小説家もまた単文を多用し、複文･混文は少ない。

ロ　T-unit当りの文節数は学生のほうがプロの２倍である。この、T-unitの差が学生とプロの最大の違いである。ちなみに、プロの文節数は小学2年生のそれにあたる。

ハ　T-unit当りの節数も学生のほうが倍に近い。

ニ　文中の逆接のBUT相当語はプロ､学生ともに見られるが、学生のほうが多用しており、論旨の流れを不鮮明にしている。

英語では熟達した文の指標はT-unitの長さにある。したがって、英語の作文の指導では文を結ぶSentence　Combining、あるいはfree modifierの付加によるcumulative sentenceを作る訓練をする。日本語の場合は逆である。推敲では、長くなった文をもっぱらdisjoinして、T-unit当たりの文節を短くし、AND相当語句で上手に続けていくことである。英語では‘And, but, so sentences are poor sentences.’と言うが、日本語には当てはまらない。翻訳もまたしかりである。直訳の和文英訳は、統語的に未熟な英文を作る原因である。直訳の英文和訳は、T-unitが大きすぎ、理解困難な日本文になる。

【注】因みにAND相当語句のいくつかをあげると、次のようなものである。

ところが、つまり、換言すれば、したがって､その結果､また､さらに､具体的に言うと､もっとも､以上要するに、すなわち（西原）

だから､ですから､すると､そ(う)したら､そこで、したがって、そして、それで、それから（三浦）

（資料に用いた文の、読点の前の順接の止め方には次の例がみられる。　-i, -e, -oでの止め方が多い）驚いたし、確立し、育ち、以下になり、倒れ、改め、挟んで、振り返って、教科書にもあって、倒壊すると、等

資料に用いた作品

堺屋太一　『「大変」な時代』　講談社　1995

立花　隆　『「知」のソフトウエア』　講談社　1984

大野　晋　『日本語の文法を考える』　岩波書店　1978

竹内久美子　『そんなバカな！遺伝子と神について』文芸春秋　1994

丸谷才一　『日本語のために』　新潮社　1978

加藤周一　『読書術』　光文社　1962

《小説》

（直木賞）

芦原すなお　『春秋デンデケデケデケ』1991

伊集院静　『受け月』　1992

高村　薫　『マークスの山』　1993

佐藤雅美　『恵比寿屋喜兵衛手控え』1994

海老沢泰久　『帰郷』　1995

高橋美夫　『狼奉行』　1991

出久根達郎『佃島ふたり書房』　1992

大沢在昌　『新宿鮫　無間人形』1994

中村　彰　『二つの山河』　1995

（芥川賞）

小川洋子	『妊娠カレンダー』	1990	萩野アンナ	『背負い水』	1991
辺見　庸	『自動起床装置』	1991	松村栄子	『至高聖所』	1991
藤原智美	『運転士』	1992	多和田葉子	『犬婿入り』	1992
吉目木晴彦	『寂寥郊野』	1993	奥泉　光	『石の来歴』	1994

参考文献

板坂　元　『何を書くか、どう書くか』　光文社　1981

谷崎潤一郎　『文章読本』　中央公論社　1974

西原鈴子　日英語対照修辞法『日本語教育』72号

馬場博治　『読ませる文章の書き方』　創玄社　1983

三浦順治　『和文英訳を超えた新英文構成法』開隆堂　1987

“　日本語・英語のセンテンスの長さ(2)『秋田英語英文学』第37号、秋田英語英文学会　1995

森岡健二　『文章構成法』　至文堂　1981

光村図書　『国語表現教授資料』　1968

Bauer, Brigitte L. M. *The Emergence and Development of SVO Patterning in Latin and French.* Oxford U. Press. 1995

Christensen, Francis. The Problem of Defining a Mature Style. *English Journal, 57*

Faigley, Lester. The Influence of Generative Rhetoric on the Syntactic Maturity and Writing Effectiveness of College Freshmen. *Research in the Teaching of English. Vol. 13, No.3.* 1979

Hunt, Kellog W. Recent measures in syntactic development. *Elementary English 43* 1966

Yngve, Victor H. A Model and an Hypothesis for Language Structure. *Proceedings of the American Philosophical Society* 104, 1960

Syntactic Maturity: an investigation of professional writers vs. university students

Junji Miura

Abstract

This paper attempts to compare the stylistic difference of expository sentences between professional writers and university students.

This analysis concludes

1. that professionals write simple sentences, and students like to use mixed sentences.
2. that students write twice as long T-units as professionals. This is a general characteristic of student's writings in Japanese. The average length of T-unit by professional Japanese writers corresponds to the second grade of elementary school.
3. that professional Japanese writers demonstrate great artistic variety in connecting short T-units through the use of "AND equivalents."
4. that disjoining of sentences should be encouraged in Japanese composition while sentence combining and addition of free modifiers are practiced in English writing.